Parīkṣāmukhasūtra における PRAMĀṆA の分類

伊　藤　篤

㈠完全知（kevala）を頂点とするジャイナ論理学特有の認識根拠 pramāṇa）の分類は、アーガマに見られる五つの正しい認識（jñāna）を出発点として、Umāsvāti 以後、数々の変遷を経て、比較的後代に確立したと考えられる。その pramāṇa の分類の変遷の過程で、九世紀頃のジャイナ論理学者 Māṇikyanandin は師とするところの Akalaṅka の影響下において、本稿で扱う Parīkṣāmukhasutra（以下 Pms.）[1] を著わし、その中で彼は従来のジャイナ論理学を踏襲しつつも幾つかの独自の論理思想を展開し、特に pramāṇa の分類の確立の点で、彼以後のジャイナ論理学に与えた影響は無視し得ない。

㈡ Umāsvāti による pramāṇa の分類は感覚器官（indriya）にもとづく感官知（mati）を直接知覚（pratyakṣa）とせず、内容的にはアーガマに見られる伝統的解釈を受け継いだものである。Jinabhadra, Siddhasena によつて mati は sāṃvyavahārika として pratyakṣa とされ、kevala などの三つは pāramārthika とされた。

㈢ Akalaṅka によつて pramāṇa の分類の確立はその基礎を得た。しかしそれは後代に見られる確立した分類と比べて、若干の相違を示している。即ち彼の分類[2]は Laghīyastraya などによれば sāṃvyavahārika-pratyakṣa を indriya 及び anindriya 即ち manas にもとづくものの二種に分け、manas にもとづく pratyakṣa として先の Umāsvāti が mati と同義とした smṛti, saṃjñā, cintā, abhinibodha の四種が言語表現以前のものに限つて入れられている。更に parokṣa の種類に関しても śruta の中に arthāpatti, upamāna, anumāna を含めている。これらの点によつて Akalaṅka 以後の分類との若干の相違がある。

㈣ Pms. は全体で六章から構成され、第一章で pramāṇa の定義、第二章で pratyakṣa、第三章で parokṣa が説かれている。[3] pramāṇa とは「未確定の対象と自らの存在とを確定する認識」（I-1）として定義されている。これについては Prabhācandra による注釈書 Prameyakamalamārtaṇḍa によつて「ランプの光のようなもの」と説明され、これは従来の定義とほぼ同じであるが、Hemacandra によつて更に厳密に定義されている。[5] pratyakṣa については「他の全ての pramāṇa にもとづかないそれ自体で明瞭な認識」（II-3）として定義され、先の Akalaṅka が anindriya-pratyakṣa として smṛti 以下の四種を言語表現以前のものに限つて認める点を暗に否定して、言語表現に関わらず parokṣa たるものとしている。parokṣa の定義については逆に「pratyakṣa などの他の pramāṇa にもとづく認識」（III-2）として、記憶（smṛti）、再認識（pratyabhijñāna）、論理思考（tarka）、推論（anumāna）、聖典知（āgama）の五種を数え、smṛti とは「過去に経験したことにもとづく認識」（III-3）と定義され、pratyakṣa にもとづくものとされている。pratyabhijñāna とは「記憶にもとづく認識」（III-5）と定義され、この pratyabhijñāna は更に五種に分られ、Pms. では実例でのみ示されているのであるが、Ananta-vīrya による注釈書 Prameyaratnamālā によれば、(1)同一性再認

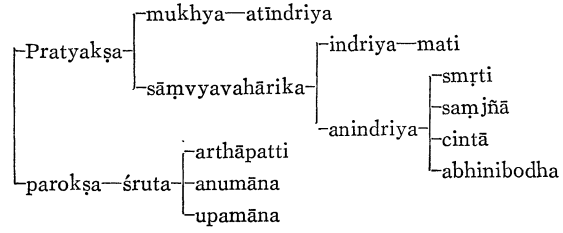
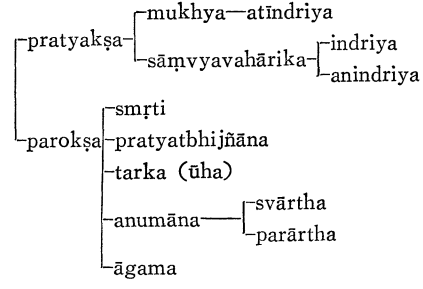
識（ekatva-pratyabhijñāna）、(2)類似性再認識（sādṛśya-°）、(3)相異性再認識（vailakṣaṇya-°）、(4)相互関係性再認識（pratiyogi-°）、(5)共通性想起再認識（sāmānyasmṛtirūpa-°）と説明されている。これはニヤーヤ派の upamāna を批判して五種に拡大されたものと考えられる。anumāna については為自比量、為他比量の二種に分ける他に、因（hetu）の種類、論証式などについて第三章の大半を費して論述している。

(五) Pms. 以後の pramāna の分類について、Devasūri : Pramāṇa-nayatattvālokālaṅkāra（以下 Pnt.）、Hemacandra : Pramāṇamīmāṃsā（以下 Pm.）、Yaśovijaya : Tarkabhāṣā などによつて検討してみると、これら三者の分類は完全に一致している。Pnt. は Pms. の延長線上に著わされたものであるが、これが Pm. などと一致していることから、この時代においては pramāṇa の分類は確立していたと考えられる。従来、このような確立した分類は Akalaṅka によるとされていたのである。確かにその基礎を築いた点で Akalaṅka に負うところは大であるが、先述のように、Akalaṅka の分類には未整理の要素が多く、むしろ Māṇikyanandin の Pms. における分類が、Pnt. や Pm. などにおける分類とほぼ一致するところから Māṇikyanandin が Akalaṅka の分類を継承し更に体系的に整理して、ジャイナ論理学における pramāṇa の分類を確立したのではないかと考えられる。

以上 Pms. における pramāṇa の分類のもつ意義を Pms. とその前後のジャイナ論理学の流れから簡単に検討してみたが、Pms. も例外なく法称を中心とする当時の仏教論理学の影響を強く受けたものであり、それによつて anumāna についての考察が拡大し、逆に Pms. では伝統的解釈にもとづく kevala, manaḥparyāya, avadhi については深く説明していない点などから伝統的分類をより離れたものとなつている。

1 Parīkṣāmukha sūtram, by Māṇikyanandī together with the commentary called Parīkṣāmukha-laghuvṛttiḥ by Anantavīrya, edited by Satis Chandra Vidyābhūṣaṇa, Bibliotheca Indica Calcutta 1909.

2 Akalaṅka : Laghīyastraya, etc.



3 Pms.